

### 愛と干渉

とあるレストランの駐車場に立派な高級車が入ってきました。出てきたのは立派なスーツを着た、いかにも社長風の男性。レストランにいた高齢の女性と待ち合わせのようです。にっこり同じ席に着く様子は一見、母親孝行している息子という様子に見えましたが、実際彼はネックレスのセールスをしていました。男性はなんでもそのネックレスには特別な力があると言います。ネックレスをする途端に杖が要らなくなったりするという。実際につけて見せ、ほら動けなくなったでしょ？まやかしの実験をも信じていく様子のおばあさん。価格設定は松竹梅、男性は「真ん中の30万円のいいんじゃない」とざらりと言い、もし効果がなければ契約取り消しもできるから、とあつてないような安心を与えます。果たしてこれは親切なのでしょうか？一見おばあさんの健康を気遣う、愛ある行為かのようにですが、全く違います。これは相手の、信じる気持ちを暗示の力として利用して自分が利益を得るための、相手をだます偽りの行為でしかないのです。私たちは、他を干渉する生き方をやめて、根本的な解決へと導く「愛」を流す生き方を選んでいきましょう。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう」（使徒 3:6）

### ホセ・ムヒカ前大統領

小国ウルグアイの第40代大統領、ホセ・ムヒカは「ペペ」という愛称で国民から深く愛されました。人口320万人の小国の世界で一番貧しい大統領と言われた彼が、2012年ブラジル・リオデジャネイロで行われた国連持続可能な開発会議で語られたスピーチは、引退した今も人々の心に残っています。小国の大統領のスピーチの順番は最後に回ってきました。各国代表は自分のスピーチが終わると会場を後にしてしまうので、ホセ大統領が話すとき会場ホールには、ほとんど人が残っていませんでした。そんな中、彼は謙遜な姿勢で語り始めます。「豊かな社会をみんなで実現させたなら、この地球の資源はもつのだろうか？」「環境のために戦うのではなく、人類の幸福こそが環境の一番大切な要素である」スピーチで、現代の消費社会に問題を呈し、人類の幸せとは何かを問いました。彼は問題の本質を見ていたのです。「貧しいのはいくらあっても満足しない人のことだ」そんな風に言った彼は、収入の大半を寄付し、公邸ではなく小さな農場で暮らし、質素な暮らしを続けました。そんな姿から人々は敬意をこめて「世界で一番貧しい大統領」と呼びます。経済的には貧しくとも、彼がいかに思慮深い知恵者であり、豊かな心の持ち主であることが分かります。私たちは、してはいけないことをしていないのでしょうか？いけないと知ってはいるものの、罪悪感を持ちながらやめられずにいることはないのでしょうか？また、すべきことをきちんと行っているのでしょうか？

### もてなし合う（I ペテロ 4:12～15）

「もてなす」という行為は「干渉する」とは違いますが、私達は自分の利得の為に相手に何かをすることがあります。これが「干渉する生き方」です。下の御言葉に書かれています。

4:15 あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、悪を行う者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受けるようなことがあってはなりません。

この中で語られる、人殺し：相手を憎むこと、盗人：自分の良くのために相手の幸せを奪うこと、悪を行う者、みだりに他人に干渉する者を指しています。人を殺すなんてとんでもない、でも、あんな人いなければいいのに、そんな風に思ってしまったことはないでしょうか？それが人殺しであると聖書は語っているのです。

・盗人…比較、自分の欲の為に相手の幸せを奪う事・排除すること（物を盗むことではない）

・偽る…本心ではない言葉を発する（嘘をつくことは単なる現れである）

・干渉…自分の利得が大事（愛によらないもの）ex. 自分が不安・自分の願いを他人で実現させようとする

外側（体裁）を繕ってそうではないようにふるまったとしても、目に見えない内側（心）の偽りは取り去ることはできないのです。私達の問題は見えない内側にあることがわかります。

### 内側にある2つの感情

私たちの内側には2つの感情があります。ひとつは捨ててしまいたい、良い心を巣食う悪い虫。それが出ると、言い訳し、相手に責任を擦り付け自分の利得のために干渉します。

彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネ

の子シモン。あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの小羊を飼いなさい。」（ヨハネ 21:15）

イエス様は、良くない感情にも向き合ってくださいのお方です。愛は示されている最中には分ならず、むしろ疎ましくさえ思ってしまうことがあります。それは自分の本質の問題に寄り添われているからです。つぶやきをやめて、互いに親切にもてなし合い（問題に対して自分が受けたものを与え）、自分の能力によるのではなく神の力によって、ふさわしい神様の言葉を語り行います。

### 神の聴力テスト

～御言葉を耳で聞くのではなく心で聴いていますか？

「ウイスピーテスト」の著者は子どものころ、重度の口蓋裂で話すことも聞くこともままならず、差別を受け暗闇の人生を歩んでいました。ですが学校での聴力テストで彼にテストを担当した先生が配慮の中、聞こえる方の耳に「このかわいい子が私の子だったらよかったのに」とささやきました。この言葉は彼の人生を変えました。愛の言葉は彼に命を与えたのです。神様の言葉は干渉するためにあるものではありません。内側にあるすべての問題の善悪を判別するためにあります。私たちが心の耳で聴き、受け取りたいと心から願う時、神様が何を語っておられるか私たちの霊で聴くことができるのです。

### 死に至るまで忠実に生きる【ポリュカルポスの生き方】

ローマ統治下の古代都市、スミルナという都市は、トルコの西端、エーゲ海に位置しエーゲ海地方の中でもっとも繁栄した港湾工業都市です。ローマが栄える前から従順に仕え、市民もまた忠実にローマと神に仕えました。初期キリスト教の重要な中心地で、ヨハネの黙示録に記述された「七つの教会」の一つの所在地です。キリスト教会の殉教の正式な記録が最初に残された「ポリュカルポス」はスミルナの司教で、2世紀中頃の地で、ローマ総督によって火刑に処されたことは有名です。なぜ忠実な司教であったポリュカルポスが刑に処されることになったのでしょうか。当時のローマ皇帝、ドミチアヌスは先々帝ウエスパシアヌスの次男で、先帝チヌスの弟でしたが、立派な父と兄へのコンプレックスが募り即位後すぐに皇帝神格化に努めます。キリスト教を弾圧し皇帝自身を崇拜することを支配下へ命じ、拒んだものには容赦なく処刑しました。スミルナにも当然その命令が下されました。人々からの人望の厚い司教であるポリュカルポスは、総督から、ローマ皇帝ドミチアヌスを拝するよう言われます。総督は人望あるポリュカルポスを処刑したくなかったので、一度だけ形式上従ってくれれば自由にすると言いました。しかし彼は「イエスは一度も自分を裏切ったことはない。だから自分も裏切ることではできない。」と信仰を守り抜きました。自分が一時の炎に包まれることよりも、神の永遠の命に対する裏切りは燃えるゲヘナへ投げ込まれることになってしまう、ポリュカルポスが見ていたのはその先のゲヘナの道、それは偽善者の生き方なのだったということです。

### 最後に…

死に至るまで忠実に生きるとは、神に「せよ」と言われたことを信じて行い、「してはならない」と言われていることに死に至るまで向き合い続けることなのです。そして、神様は必ず試練の先に脱出の道を用意して下さるのですから、喜び勇んで勝利の道へと凱旋するのだ、ということ信じ続けることです。神様は貴い愛で私たちの幸せを願ってくださっています。愛とは、その人の内側にある愛を通して、その人に真剣に向き合うことです。偽善（人に干渉する）ではなく、主権をすべて神様にお委ねし良心に従って生きていく決断を選んでいきましょう。

「なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょうか。義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行うにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せなさい。」（I ペテロ 4:17-19）